



羽幌炭砦

重要産業として良質な炭を掘り昭和初期に栄華を誇った

羽幌町の歴史を語る上で欠かせないのが羽幌炭砦です。北海道の北西部は古くから「留萌炭田」と呼ばれる産炭地として知られ、各地に炭砦がありました。羽幌炭砦もその一つで、羽幌町市街から23kmほど東部の築別川と羽幌川の上流部に、今も炭砦町の跡が残っています。

羽幌炭砦は北から築別坑、羽幌坑（本坑）、上羽幌坑（二坑）の3砦区で採炭していました。明治期に砦脈が発見されたものの輸送手段がないため、炭砦開発が本格化するのには、昭和に入ってからでした。昭和15年（1940年）、炭砦と鉄道の両事業を行う会社として、羽幌炭砦鉄道株式会社が設立され、築別坑を開坑して採炭が始まりました。翌年の昭和16年（1941年）に国鉄羽幌線築別駅～築別炭砦（約16km）が開通し、その後、羽幌坑、上羽幌坑も相次いで開砦して戦後復興の原動力として躍進していきました。3地区での年間生産量は、最盛期には100万トンを超え、国内有数の優良炭砦として脚光を浴びました。また、羽幌の石炭は煙や灰が少なく、「煙突掃除の嫌いなお父さんには羽幌炭」というキャッチフレーズで人気があったといえます。

炭砦で働く人々の暮らしも豊かで、炭砦地区の人口は1万人を超えていました。スポーツも盛んで、野球部、男女バレー部、スキー部ジャンプチームは国内トップクラスの実力を誇りました。しかし、昭和30年代後半の石炭から石油へのエネルギー革命以降は、他の炭砦と同じく斜陽化していき、昭和45年（1970年）閉山に至りました。

見どころ

当時の炭砦地区には、巨大な採炭施設や火力発電所、炭砦住居跡や消防署、診療所、小学校校舎などが廃墟として残っており、敷地内や建物には入れませんが外観から当時の状況をうかがい知ることができます。また、羽幌町郷土資料館では、炭砦の時代の隆盛を伝える資料の数々を展示しています。

ポイント

全盛期の羽幌炭砦は運動部の盛んな会社で、スキージャンプ部ではオリンピック金メダリストの笠谷幸生の兄、昌生や松井孝などの選手が活躍していました。当時としては札幌の大倉山シャンツェに次ぐ規模のジャンプ台もあり、大会も行われていました。

五感で感じる！風土資産の魅力



昭和32年に高松宮ご夫妻が羽幌砦山に來山されました。それを契機に砦山周辺の住宅や施設がきれいに整備されたり、催し物が行われ、その豪華さは外来者を驚かせるほどだったといえます。まさに栄華を誇った羽幌砦山の全盛期でした。



■ 基本情報 (R7. 3)

住 所：苫前郡羽幌町
開 砦 年：1940年（昭和15年）
閉 山 年：1970年（昭和45年）